

『古代アメリカ』 9, 2006 pp. 55-63

<調査速報>

インカ国家の行政センター・エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査

(第3次)

大平秀一
(東海大学)

1. はじめに

2004年度に引き続き、2005年8～9月の約1ヶ月間にわたって、エクアドル南部高地に位置するインカ国家の行政センター、ソレダー遺跡の第3次調査を実施した¹⁾(図1)。本調査プロジェクトのメンバーは、筆者に加えて、早稲田大学文学学術院助手の森下壽典、エクアドル・カトリカ大学ヒホン・イ・カアマーニョ博物館のバイロン・カミーノとオスカル・マノサルバスの4名で、東海大学文学部学生3名も全期間にわたって現地参加した。

調査の対象とした地区は、セロ・サラルという丘のピーク付近、セロ・サラルの東～北東方向に位置し、セロ・ペンカルから連続する斜面上に点在する大型テラス群の一部、この大型テラス群最下段に確認されたマチャイ(岩陰)、墓群の一部などである。また短期間ではあったが、周辺における一般調査も実施した。以下に、調査で得られた成果の概要を報告する。

2. セロ・サラルの発掘

セロ・サラルは、バーニョ・デル・インカの東方に位置する丘で、そのさらに東方にはセロ・ペンカルが聳えている。バーニョ・デル・インカに関しては、第1次調査においてすでに発掘を実施しており、建設途上の状態で放棄されていることが明らかとなっている(大平2004; 2005a)。しかしながら、壁体の特徴や地形・標高差などをはじめとする周辺のコンテキストから、バーニョ・デル・インカには、東方すなわちセロ・サラルの方向から水を流し込もうとしていたことが明らかである。バーニョ・デル・インカとセロ・サラルの間には、バーニョを配しているテラスの東端部分すなわちセロ・サラルの裾野において、人工的に加工された大型の岩が認められる(写真1)。この岩は、バーニョ・デル・インカの側からみると、セロ・サラルと同じ形に加工されており、一つのワカであったと判断される。以上のような状況から、セロ・サラルは、インカ時代において、象徴的な水源として儀礼的な意味合いを付与され、信仰の対象となっていた丘と想定することが可能である。

上述したバーニョ・デル・インカとセロ・サラルの位置関係は、ソレダー遺跡北方約2.5kmに

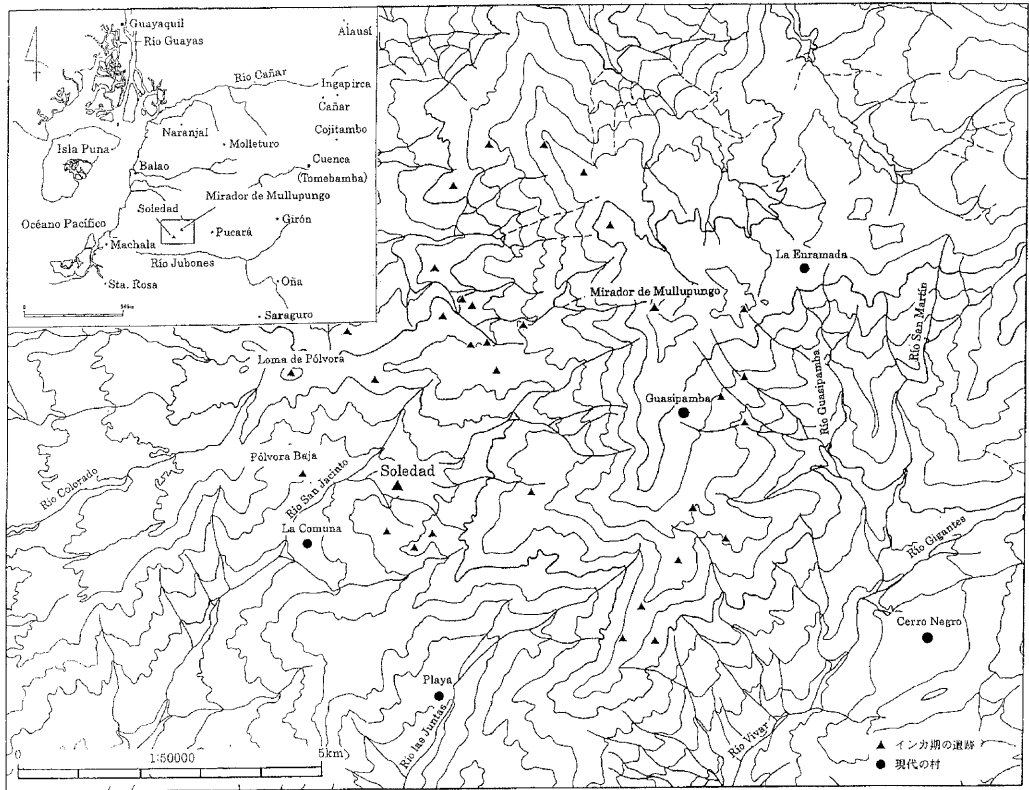


図1 エクアドル南部全図・調査地周辺図

位置するボルボラ・バハ遺跡のバーニョ・デル・インカをめぐるコンテキストと酷似している。ボルボラ・バハ遺跡では、数段にわたる大型テラスの上に、二槽のバーニョ・デル・インカやワカが配されており、その背後にはロマ・デ・ボルボラという丘が聳えている。2003年に実施した調査において、このバーニョ・デル・インカとロマ・デ・ボルボラとの間の斜面に設けられた小テラスで、一基の墓が検出された。この墓は、おそらくバーニョ・デル・インカの 신설に伴ってなされたカパクチャ(Capacucha)の儀礼において、犠牲に捧げられた少女を埋葬したものと考えられる(大平2005b)。セロ・サラルの頂上ならびにその周囲で実施した発掘は、 신설を間近にしたソレダー遺跡のバーニョ・デル・インカにおいても、ボルボラ・バハ遺跡と同様のコンテキストでカパクチャの儀礼が執り行われている可能性が高いと判断し、若年の犠牲者を埋葬した墓の検出を目的として実施された。

セロ・サラルにおいて、発掘の対象とした場所は、丘のピーク西側直下に配された2枚のテラスと丘のピークである。面積が50平米に満たず、表土からは如何なる遺構も確認できなかったテラス1とテラス2からは、直接的にバーニョ・デル・インカを見下ろすことが可能である。発掘の結果、これらのテラスには、黄褐色を呈する自然層の上に、30-60cm前後にわたってこげ茶色土を人工的に積んでいることが確認された。この土層からは、土を積む際に混入した粗製土器の破片や石斧の破片が出土した。これらのテラスからは、犠牲者を埋葬した墓は検出されなかった。

セロ・サラルのピークは平坦で、西側がやや高まったテラス状の地形を呈している。ピークでまず発掘の対象としたのは、バーニョ・デル・インカを直接見下ろせる西側部分である。発掘の結果、表土下約 10cm 程度のレベルから、硬質の明こげ茶色土の床面が検出され、同質の土がおおよそ 50cm 程度堆積し、黄褐色を呈する自然層にいたった。明こげ茶色土からは多様なレベルから、比較的多くの粗製土器の破片が出土した。これらは、土を人工的に積んだ際に投げ込まれたものと判断される。この発掘を通して、丘のピークの地形は、人工的に整えられていることが明らかとなった。これは、この丘のもつ儀礼的意味合いを再確認させるデータである。しかしながら、犠牲者を埋葬した墓を検出することはできなかった。

セロ・サラルのピークでは、一段下がった東側部分に、円形を呈した小規模の高まりが確認されたため、これも発掘の対象とした。発掘を通して、茶褐色の土や石を投げ込んで直径約 4.5m の円形プラットフォームを構築していることが確認された（図 2、写真 2）。アンデス先住民社会の世界観および現代の民族誌と対比して考えれば、このプラットフォームはセロ・サラルあるいはその東方に聳えるセロ・ペンカルの信仰と関連した祭壇であった可能性が高い。しかしながら、プラットフォーム上から、儀礼を執り行った明瞭な痕跡は検出されなかった。

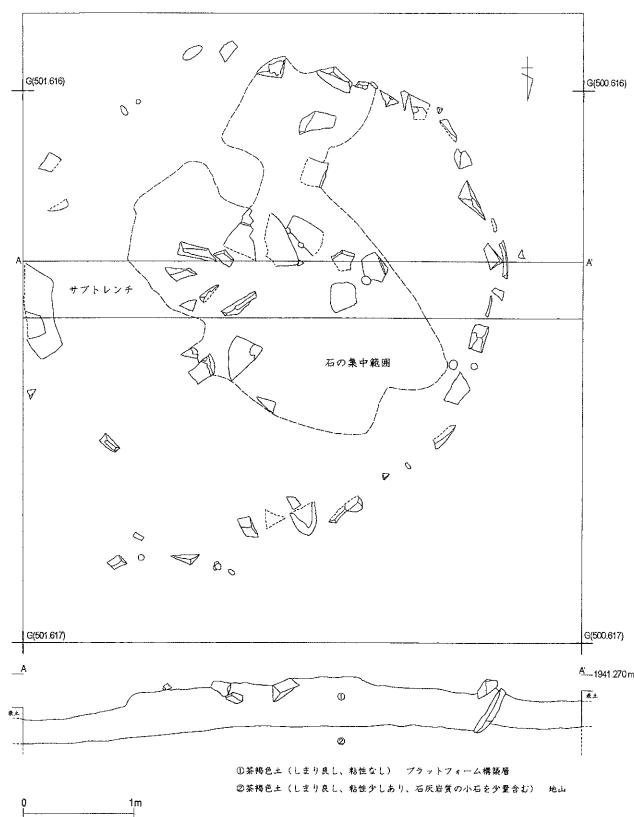


図 2 セロ・サラル頂上 円形基壇平面図およびサブトレンチ南面セクション図

第 3 次調査において実施したセロ・サラルの発掘では、カパクチャの儀礼を執り行った痕跡を確認することができなかった。カパクチャの儀礼で犠牲に捧げられた若年者の墓は、意図的に表土から見えないように構築されており、その検出には多大な困難を伴う（大平 2005b）。今後、セロ・ペンカルにいたる斜面も含め、さらなる調査を加えていく必要がある。なお、セロ・サラルにおいては、カパクチャとは別の意味合いを帯びた 2 基の墓の発掘も実施したが、これについては後述する。

3. 大型テラス群の発掘

セロ・サラルの東および北東方向には、セロ・ペンカルから下る斜面上に、幅、奥行き共に 20~30m 程度の比較的大型のテラスが複数認められ、中には三段

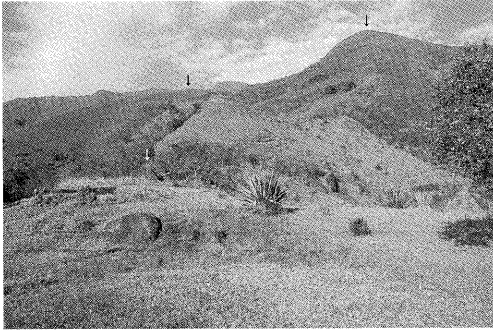


写真1 セロ・ペンカル(上)、セロ・サラル(中)、ワカ(下)



写真2 セロ・サラル頂上の円形基壇

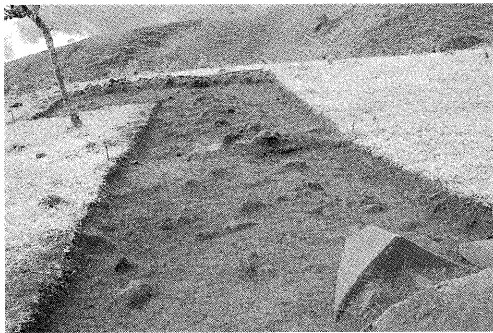


写真3 大型テラス群の床面



写真4 岩陰とセロ・ペンカル

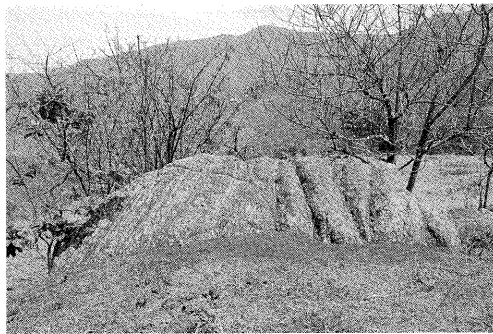


写真5 岩陰を構成する大岩上部の溝

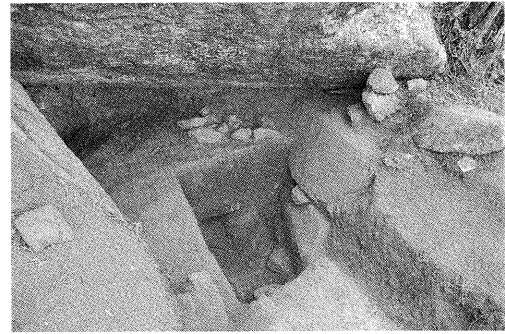


写真6 床面構築層と岩陰内奥側の掘り込み

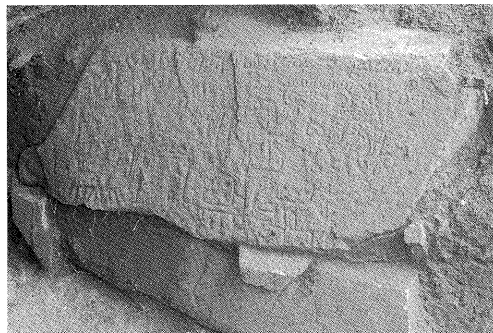


写真7 岩陰内北側の岩



写真8 岩絵

にわたって連続的に配されている部分もある。このテラス群は、ソレダー遺跡の中で、最も標高が高いゾーンに位置しており、それぞれのテラスのレベル差は最大で約 30m にもおよんでいる。さらに、これらのテラス上には、近隣で確認されているインカ時代の畑のように、畝の跡が認められない。こうした特徴より、これらのテラス群は、コルカ（倉庫）建設を目的としていた可能性があるかと判断し、発掘を実施して確認することとした。

大型テラス群の表土上には、石の散在が認められるとはいえ、明瞭な壁体基礎部のような建造物の痕跡は確認できなかった。しかしながら、連続する三段のテラスの中段のみで、例外的に、壁体崩落痕のような東西に列をなした石集中が認められた。大型テラスの発掘は、この中段テラスにおいて実施された。発掘の結果、テラス上からは建造物が確認されなかったが、表土下 10~15cm 程度のレベルから、暗こげ茶色度の床面が検出された（写真 3）。この床面の一部ならびにその構築層中には、極めて多くの石が投げ込まれていた。中段テラスからは、建造物の痕跡が検出されなかった。表土から見えていた石の集中は、テラス建設の後の時代に属するものであることが確認された。

インカ時代の食料保存用コルカは、温度や湿度のコントロールのために、床面に石を敷いたり、床面下部に通風溝やカナルを設けるなど、様々な工夫が凝らされている。現段階において、これらの大型テラス群がコルカ建設を目的としたものと断定することはできないが、中段テラスは、これまで周辺域において発掘を実施してきたテラスの構築状況とは明らかに異なっており、少なくとも農業用のテラスとは考えにくい。残念ながら、これまでに報告例はないが、食料保存のための工夫は、テラスそのものにも施されている可能性もあるだろう。今後のデータの蓄積を待ちたい。

4. 岩陰の発掘

連続する三段のテラスの内、最下段のテラス東端際部分、すなわち中段のテラスから下る斜面と最下段テラスの間に生じた段差部分には、自然岩が南北に連なっている。この一連の自然岩の中央部分には、表面に連続的に溝を掘り込んだ最大の岩があり、その下方に岩陰が構成されている（写真 4,5）。ソレダー遺跡には、比較的多くの岩陰が多様な地区に認められ、周辺住民からはそれらの岩陰から人骨が出土するという情報が得られていた。アンデス地域では、岩陰を利用して遺骸を安置する埋葬方法があり、文書によればそうした場所がマチャイと称されている。ソレダー遺跡における岩陰遺跡の特徴を把握するため、テラス最下段に確認された岩陰の発掘を実施した。

発掘の結果、この岩陰からは、人骨や副葬品は出土しなかった。遺骸を埋めずに、表土上に安置することも想定され、すでに風化・劣化あるいは盗掘を受けている可能性も考慮に入れる必要もあるとはいえ、この岩陰が埋葬場所として利用されたことを示す資料は得られなかった。しかしながら、この発掘を通して、インカ社会における岩陰の意味を考察する上で、いくつかの新たな情報を得ることができた。

この岩陰内では、表土下約 10cm 程度のレベルで、比較的硬質の暗こげ茶色土に石の小塊を混入させた床面が構築されていた。この床面の構築層は、明黄土色を呈する自然層の上に積まれていたが、この自然層は東側すなわち岩陰内奥側が、段差を設けて深く掘り込まれていた²⁾（写真 6）。床面はこの段差部分のレベル調整をしながら、平坦に仕上げられている。

岩陰内の南側には、長さ 1m 前後の大型の岩ブロックが壁体のように二段積まれており、その上段の岩には、形成期のものと想定される岩絵が施されていた（写真 6,7）。この岩絵は、インカ時代に切り出されたものであり、岩陰との関連性はない。岩陰内の北側には、岩陰を形成している岩の一部が伸びているため、岩陰内奥と併せて三方を岩で囲まれた空間が構成されており、床面はこのスペースを埋め込むように構築されていることになる（写真 8）。いうまでもなく、狭い岩陰内は十分に土を叩いて床面を構築することが困難である。南側に積まれた大型石ブロックは、敷いた土が流出しないように配されたものと考えられる。

この岩陰を形成している天井部分には岩を加工した痕跡が残存している。これに床面構築の状況を考え合わせると、この岩陰は自然のものではなく、人工的に構築されたものと判断することが可能であろう。この岩陰の形状は、内奥に向うにしたがって天井部分が低くなっている。したがって、岩を加工するための作業スペースは、奥に向えば向かうほど狭くなってしまふ。岩陰下の自然層が一段深く掘り込まれているのは、おそらく岩を加工する際の作業スペースの確保と関連しているものと考えられる。

この岩陰からは、この岩陰の機能と直接的に関連する遺物は 1 点も出土しなかった。床面の地業層からは、インカ時代の土器片と形成期の土器片が多数出土した。これらは、床面構築のために積まれた土に混入していたか、あるいは投げ込まれたものと判断される。前述した形成期の特徴を呈した岩絵は、床面より下方に位置しているため、岩陰と直接的な関連性をもつものではない。単に壁を構築するために、インカによって切り出されて再利用されたものと判断される。

インカの諸遺跡には、地域を問わず、多くの岩陰が認められる。おそらくクスコ地域において、入念に構築された岩陰を除けば、大半のものは自然の岩陰を利用したものとイメージされているといってもよいだろう。一見しただけでは自然の岩陰のようにみえても、実際には入念に人の手を加えて構築されていたソレダー遺跡の岩陰は、インカ社会の遺跡をめぐる景観あるは岩をめぐる世界観を考える上で、興味深いデータとなった。

ソレダー遺跡には、広場北方の湿地帯周辺域をはじめとし、多くの岩陰遺跡を確認しており、中には比較的規模の大きなものも認められる。こうした岩陰の特質を明らかにしていくため、さらに発掘資料を加えていく必要がある。

5. 墓の発掘

これまでの調査概報でも述べてきたように、調査地周辺域には、簡易的に掘り込まれた多数の土壌が確認されている³⁾。この土壌の分布は、アンデス山脈西山系最西端部分の尾根上に建設されているミラドール・デ・ムユブンゴ遺跡から海岸方向に向うゾーンに限られており、その数は概算で 3000~5000 にも及ぶ（大平 2003; 2004; Odaira 2005）。これらの土壌は、構築の特徴より、簡易的に構築された墓である可能性が極めて高く、周辺域で確認されている武力衝突に伴う死者を埋葬した墓であるという仮説的解釈を提示してきた。しかしながら、これまで計 14 の土壌の発掘調査を進めてきたが、これらの土壌からは、人骨が出土したデータは、わずか一例しか得られておらず、上述した仮説的解釈を立証するためにさらなるサンプルを増やしていく必要があった（大平 2005a）。

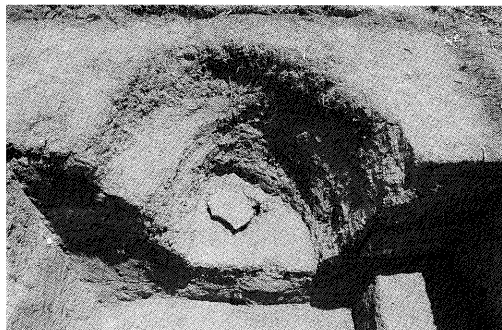


写真9 墓の石蓋(TU1)



写真10 左下顎部出土状況(TU1)

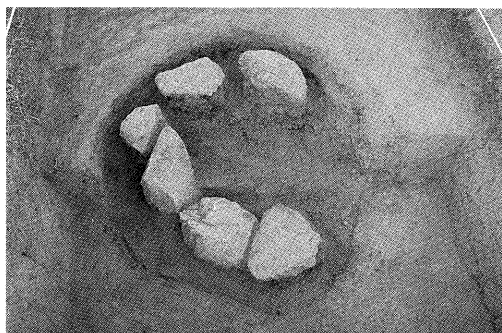


写真11 墓の石組み(TU2)

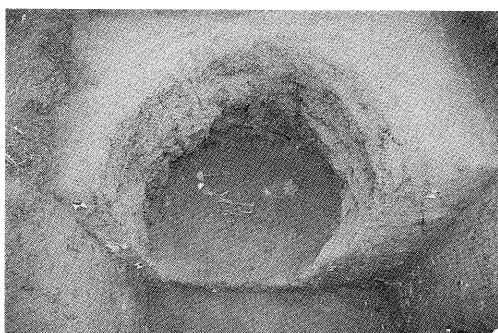


写真12 人骨出土状況(TU2)



写真13 人骨出土状況 細部(TU2)



写真14 左大腿骨の傷(TU2)

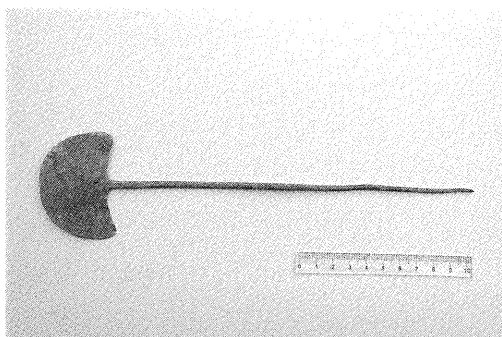


写真15 トウブ(TU2)

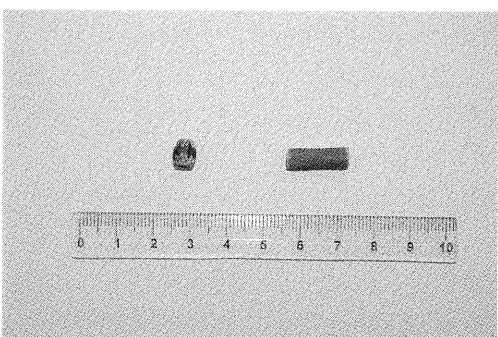


写真16 ガラス製ビーズ(TU2)

こうした経緯で、第3次調査においては、前述したセロ・サラルの頂上付近で2基、さらにその北方約1.5kmの地点に位置する小丘で2基、計4基の土壌を新たに発掘した。発掘の結果、セロ・サラルの頂上付近の2基は、どちらも入念な石組みや石蓋を配していたにもかかわらず、やはり人骨および副葬品は含まれていなかった。一方、後者2基からは、人骨が出土した。

セロ・サラル北方の小丘で発掘の対象としたのは、丘の北端部分に配されたTU1と丘の西端部分に配されたTU2の2基である。TU1は、上層部が攪乱を受けていたが、その攪乱は下層には及んでおらず、石蓋の一部は残存していた(写真9)。墓の底部から40cm程度のレベルから、歯を含む左下顎部分の骨が横向きに出土した(写真10)。さらに、底部直上から歯ならびに腕あるいは脚の骨の一部と思われる長い骨の一部が出土した。このような出土状況から、墓には二体以上の遺骸が埋葬されたこと、あるいは遺骸の一部のみが埋葬されたことなどが示唆される。TU1には、副葬品が含まれていなかった。

一方TU2は、上層の石組みをはじめ、これまで得られている土壌のサンプルと同様の特徴を有していた(写真11)。この土壌からは、底部付近から比較的良好な状態で人骨が出土し、埋葬時の諸相を具体的に示す資料がはじめて得られた(写真12)。被葬者の頭部は、頭蓋を上にし、顔面を北東方向に向けた状態で、墓内の南西部から出土した。一方、大腿骨は墓内の北東部より出土したが、膝部分が南西方向すなわち頭部の方向を向き、付け根部分が北東方向を向いていた(写真13)。さらに、両大腿骨の間からは、上腕の骨が出土した。遺骸が、通常の状態では埋められたのであれば、大腿骨の位置は逆になっていなければならない。このような人骨の特異な出土状況に加え、左側大腿骨には、鋭利な刃物で切りつけられ、骨折している状況が認められた(写真14)。以上の状況から、被葬者の頭部と下半身は、切り離されていたことが示唆される。もちろん、頭部と下半身の骨は、同一の遺骸ではなかった可能性も考慮に入れる必要はあるが、この墓の被葬者が惨殺されていることは明らかであろう。

TU2からは、土器、ビーズ、金属製品、貝、などの多くの遺物・副葬品が出土した(写真15)。これらの内、埋葬に際して副葬されたのは、土器と貝である。残りのものは被葬者が身に付けていたものと想定される。副葬品の中で着目されるのは、被葬者の頭部周辺から出土したビーズの材質である。これらのビーズには、貝あるいは骨製のものに加え、ガラス製のものが多数含まれている(写真16)。これは、被葬者の惨殺が、植民地時代においてなされたことを示している。

6. おわりに

ソレダー遺跡の第3次調査においても、同地域におけるインカ国家の特質を理解する上で、貴重な資料を得ることができた。特に、ムユング遺跡以西の多様な場所に3000-5000は認められ、これまで土壌と称してきたものが、明らかに墓と確認されたことは大きな成果であった。しかも、被葬者が惨殺されていたことは、武力衝突に伴う死者を埋葬した墓であるという、これまでに提示してきた仮説的解釈に合致するデータとして着目される。加えて、これらの墓の被葬者の中には、植民地時代に埋葬された状況が確認されたことは、インカの行政センターをめぐる武力衝突が、植民地時代にまで生じていたことを示すものであり、ムユング領域の歴史を考える上で、極めて重要な資料といえる。とはいえ、これまでに得てきた墓のサンプルは、3000-5000の内のわずか18例に

過ぎない。今後周辺諸遺跡の調査を進めながら、さらにサンプルを加えていく必要がある。

【謝辞】

2005年度の調査は、科学研究費補助金(基盤研究 B<2>[海外学術調査]、研究課題名:「インカ国家とエクアドル南海岸域の関係をめぐる実証的研究」、研究課題番号:15401027)によって実施された。また、日本国内におけるデータ整理・分析の実施に際して、東海大学文学部教育研究補助金を受けた。本論の図版は、早稲田大学文学学術院助手の森下壽典氏に作成していただいた。ここに銘記して、皆様に深謝申し上げる。

註

- 1) ソレダー遺跡全般に関する情報は、大平(2003; 2004)を参照。また、発掘にいたる経緯に関しては、大平(1999; 2003; 2004)、Odaira(1999; 2000; 2005)を参照。
- 2) この岩陰・大型テラスが構築されている斜面の地形は、東側から西側に向かって下っており、オリジナルの地形では、自然層の堆積も同様の特徴を呈していたはずである。しかしながら、岩陰下の自然層は、これとは逆に、東側が低く、西側が高くなっている。
- 3) この土壌の特徴に関しては、大平(2003; 2004)、Odaira(2005)を参照。

参考文献

大平秀一

- 1999 「インカ社会と『価値の高いもの』—スポンディルス貝をめぐって」『出光美術館館報』107号 4-28頁。
- 2003 『エクアドル南部のインカ帝国に関する実証的研究』 2001-2002年度科学研究費補助金基盤C(2)成果報告書
- 2004 「エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査(第1次)」『古代アメリカ』第7号 85-90頁。
- 2005a 「インカ国家の行政センター・エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査(第2次)」、『古代アメリカ』第8号、31-39頁。
- 2005b 「インカ国家における人間の犠牲—ボルボラ・バハ遺跡の墓をめぐって」『マヤとインカー王権の成立と展開』(貞末編)、279~298頁、同成社。

Odaira Shuichi

- 1999 Un Aspecto del Control Inca en la Costa sur del Ecuador: una evidencia encontrada en Mirador de Mullupungo. *Tawantinsuyu: an international journal of inka studies*, Vol.5, pp.145-152.
- 2000 Excavaciones del Mirador de Mullupungo: Nuevos datos de la relación entre la costa y los Incas. In *Estudios Latinoamericanos en Alemania y Japón*, edited by Shozo Masuda, pp.201-202, Fundación Shibusawa para el desarrollo de la Etnología, Tokyo.
- 2005 Expansión Inca al Oeste de Tomebamba: Nuevos Datos Arqueológicos entre la Sierra y la Costa Ecuatoriana. XAMA, Publicación de la Unidad de Antropología. vol.15-18, pp.61-72, Instituto de Ciencias Humanas, Sociales y Ambientales (INCIHUSA), Mendoza, Argentina.

